
反乱の灯火

有象無象

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反乱の灯火

【Nコード】

N0265BA

【作者名】

有象無象

【あらすじ】

ごく普通の高校生である俺は、突然異世界に召喚される。待っていたのは奴隷のような生活だった——— 剣と魔法が存在する世界。腐敗した支配階級、貧困にあえぐ国民。そして——— 奴隷たち。彼が見たものは、余りにも衝撃的だった。これは、独りぼっちになった彼が、自由を求めて奮闘するお話

突然の出来事（前書き）

処女作です。完結できるよう精一杯努力していきますので、どうか温かい目で見守って下さい。誤字脱字やおかしな表現等ありましたら、どんどんご指摘をお願いします。

突然の出来事

今日は、一年間でもかなり喜ばしい日だろう。

学生である自分が、毎日の勉強から長期間解放される、その初日。

そう、夏休みだ。

といっても、今日は終業式がある日。教師やら校長やらの長ったるい話をこれからじっと聞いていなければならぬことを考えると、憂鬱な気分になる。が、それも午前でおわり、午後からは自由を満喫できることを考えれば、自ずとテンションが上がってくるものだ。

俺は高橋徹夜、16歳。身長は169cm。高一で、部活には入っていない。なので、別段毎日忙しかった訳はないが、それでも夏休みだ。当然高校から課題が出るが、もう既に半分ほど終わっているし、アルバイトの予定も一週間ほどないので、今日の午後からしばらく遊びほうけても問題はない。

さっき部屋で目が覚めて、今は7時。バスの時刻まではまだ時間がある。俺は食パンをトースターに放り込んでから、顔を洗いに洗面台へと向かい、鏡と向かい合う。

今日はあまり寝癖がついていない。目にかかる程度に伸びた黒髪は、珍しく爆発していなかった。

冷水で顔を洗って、再び鏡を見る。映し出された俺の顔は、そこそこ、だと自分では思う。

中学校時代はサッカー部だったからか、だいぶ日に焼けていた。

洗顔を済ませた俺は着替えも終え、目玉焼きを作って、焼きあがった食パンにのせて食べた。そこで、昨日醤油を買っておけば良かった

たと後悔する。とろりと程よく半熟な目玉には、醤油が合う。パンに乗せて食べても、それは変わらない。

俺は高校に入ってから一人暮らしだ。中学校の時は両親と三人家族で住んでいたが、俺の強い要望により、親も一人暮らしを認めてくれた。今は、親からの仕送りとアルバイトの給料で生活している。俺の住んでいるマンションは学校からはバスで通わなければならぬほど遠いが、コンビニもスーパーもバス停も近くにあるので、何も困ることはない。

とくに持つて行く物もなく、いつもよりかなり軽い鞆を持つてマンションの4階にある部屋を出た。エレベーターに乗って1階まで降り、五分ほどでバス亭に着いた。すぐに来たバスに乗り込む。残念ながら座れないようだが、学校まで十数分なので、とくに問題はなかった。学校に到着して少し経ち、チャイムが鳴った後、俺は友人とたわいもない話をしながら、教師の指示に従って体育館へと向かい、そして。

こっちゃんのおはなし
地獄の時間が始まった。

……ありえない。なぜこうも長引くんだ？

自分が同じことを二度以上言っていることに気がつかないのか。この耄碌じじいが！

なんて言う訳にはいかないが、それにしても長い。30分は続いているだろう。

俺の周囲の同級生達は半分ほどが寝ていた。俺も寝ることに決めた。

終業式も終わり、放課後。

俺はまだ家に持って帰っていなかった、勉強に必要な荷物を鞆に詰

めて、学校を出た。

寄り道をすることもなくマンションまで帰ってきた俺は、エレベーターに乗り込む。他に誰もエレベーターに乗ってこないことを確認してから、4階のボタンを押した。扉が閉まり、上昇が始まる。

——そして、異変が起こった。

その光に気付くのに時間はかからなかった。視界の下、足元。視線を下げた俺が見たのは、エレベーターの床全面が白く光り輝いている光景だった。

驚きの声を上げる間もなく全身が光に包まれ、視界が白く塗りつぶされる。

1階から2階へと上がる途中、エレベーターの中に爆光が満ち、すぐに消えた。

——— 目的の4階に着き、エレベーターの扉が開かれる
そこには誰の姿も無かった。

混乱

何だ、ここは・・・？

目を覚ますと、全く知らない場所にいた。いや、正確には、知識として知ってはいるが、俺は今まで直接こんな場所に来たことはない。連れてこられたのか？ そう思ったが、こんな場所に“連行”される理由を作った覚えもない。第一、“連行”するにしても、現代にこんな場所を使用する者はいないだろう。

―――――牢屋だ。

三方を石壁に囲まれ、残りの一面には鉄格子がはめ込まれている。俺はいま、鉄格子を正面に見て右側、隅に置かれたベッドに寝ころんでいた。

訳がわからない

なぜ俺はこんな所にいるのか。混乱する頭で必死に考えるが、答えは浮かんでこない。今現在分かるのは、俺が捕らわれていることと、何者かに連れ去られたらしい、ということだけだった。

一応、ベッドから立ち、俺から見て鉄格子の左側にある扉を開けようとするが、予想どおり鍵が掛かっている。後ろを振り返っても窓はなく、また鉄格子に視線を戻しても、脆そうな部分はない。ピッ

キングツールでもあれば開錠できるかもしれないが、あいにくそんな道具もスキルもない。脱出は不可能だ。

待て、ここで目を覚ましたということは、一度意識を失ったということだ。意識を失う前、なにがあった？ 犯人の顔とかを見ていないか？

こんなことにも気付かないとは、今の俺の脳みそはよほど混乱しているようだ。

なにがあった？ ————— 思い出した。

学校から帰って、マンションに到着して、エレベーターに乗ると、突然床から光が—————
そこで意識が途切れたんだ。

……結局、俺がなぜ牢屋にぶち込まれているのかは不明のまままだ。

あの光はなんだったのか。俺が犯人の姿を見ていないことを考えれば、俺はあの光によって気絶させられたことになる。スタングレネードか？ いや、スタングレネードは爆音と閃光で相手を無力化する手榴弾の一種だ。そんな鉄の塊がエレベーターに投げ込まれば気付かない筈がない。それに、スタングレネードの閃光だと仮定するなら、最初にエレベーターの床が光っていたことの説明がつかない。

「ああもう、一体なんなんだ！」

つい口に出してしまった。少しして、物音。何か物が擦れたような、そう、学校でよく聞く音。
イスをずらした音だ・・・！
つまり、人がいる。

考え付くと同時に、足音が反響して聞こえた。鉄格子の向こうにある通路、俺から見て右側の角度的に見えない辺りから響いてくる。だんだん大きくなってくるから、近づいてきているのは明白だ。俺の声が聞こえたのだろうか。この牢屋は音が響く。十分考えられた。

十中八九、俺を誘拐した奴だろう。ここが牢屋であることを考えれば、看守なり見張りなりがいるはず。
俺が目覚めるのを待っていた、ということだろう。

音が近づいてくるにつれて、違和感をいだいた。反響する足音に紛れて、カシャン、カシャン、と金属が擦れるような音が聞こえる。なぜ——————考える間もなく、足音の主が姿を現した。疑問も解消した。

金属製の胸当て、腰当て、脛当て、腕当て、さらに顔の上半分から頭部を覆う兜を身に着けた、男性。
極めつけは腰に差してある剣らしきモノ。兜からは金髪と青い目が覗いていた。

どこからどう見ても、兵士だ。それも、中世ヨーロッパの。

—————俺はタイムスリップしたのか？　そして、さらにヨーロッパへ飛ばされた？

ありえない考えは、当然裏切られた。

「出る。グレイン宰相様がお待ちだ」

兵士が低い声で言った。俺はさらに混乱する。内容もさることながら、今この兵士は流暢な日本語を喋ったのだ。中世のヨーロッパに現代と同じ日本語を喋れる人間なんていたはずがない。何かのドッキリ番組か？ 当然の考えが浮かぶが、俺は有名人でもなんでもないから、そんな事をする理由がない。そもそも牢屋のどこにもカメラらしき物はなかった。

兵士が牢屋の扉の鍵を開けても、情報を整理するのに精一杯な俺が動けずにいると、兵士はしびれを切らしたのだろう。少々怒気を含んだ声で「早く来い」と言い、右手で俺の左腕をつかんだ。そのまま引きずられていく。抵抗しようとも思ったが、兵士の身長は180cmほどで、腕は俺の倍ほどの太さがある。勝てるはずも無いので、大人しくすることにした。

そして問いかける。

「ここはどこですか？ 俺を解放して下さい」努めて冷静に声を出した。

兵士は答えない。ただ、俺の方に振り返って、にやりと笑った。

—————ぞっとするような、悪意ある笑み。

俺はこれがイタズラやドッキリの類でないことを悟った。

混乱、さらに（前書き）

今回は短めです。

混乱、さらに

来た道に戻っていく兵士に引きずられて牢屋を出る。

牢屋前の通路の先20メートルほどに少し広くなっている空間があり、この兵士が座っていたらしい椅子と机が見えた。さらにその先には木製の扉が見える。

通路を進むにつれて右側に他の牢屋が見えた。俺がいたのと全く同じ内装の牢屋には、無気力そうな男たちが閉じ込められている。

彼らの服もまた、現代の刑務所なんかではありえないほど簡素で、薄汚れていた。

囚人たちの視線を感じながら、俺は兵士に引きずられていく。

今気付いたが、俺は学校の制服を着ている。学校の帰りに誘拐されたので当然ではあるが、この場所では白のカッターシャツと黒のズボンはかなり浮いているように感じた。まあ、混乱に次ぐ混乱のせいで羞恥心なんて蚊ほども湧いてこないのだが。

木製の扉の前に着くと、兵士は俺の手を離した。兵士の右腕は自らの腰辺りを探っている。そこには。

鍵束があった。

兵士は十数本の鍵のうち、持つ部分が正方形になっていて、さらにその正方形に四本の横線のくぼみがある鍵を手取る。

————これは覚えておいたほうが良さそうだ。

兵士が扉を開けて鍵束を腰に戻すまでの間、俺は鍵の形を頭に叩き込んだ。

なんでさっきこの兵士が牢屋の鍵をあけた時に気付かなかったのか。あの牢屋に戻る可能性が高いことくらい分かっていただろうに。もう一度牢屋に入れられた時にしっかりと見ておかなくてはならない。

扉の先には二人の兵士がいた。俺を牢屋から連れ出した兵士と全く同じ格好だ。どうやらここで交代するらしい。必ず一人は看守が必要だからだろう。

今度は両脇を二人の兵士に固められて、牢屋前より随分広い通路を進んでいく。相変わらず石壁だが、牢屋の壁より随分綺麗だった。松明が何本も置かれ、牢屋よりかなり明るい。

目的地は随分と遠いようだった。いや、直線距離は大したことはないのかもしれないが、通路の曲がり角が多く、分岐点もまた多い。道を覚えようとしたがとても無理だ。道しるべのようなものもないので、この一切の迷いもなく歩き続ける兵士たちはすべて記憶しているのだろう。部屋の扉もかなりの数を見てきた。

途中何人もの兵士たちとすれ違う。俺を連行している兵士たちは、同僚と日本語で軽い挨拶を交わしていた。

しばらくして、ようやく目的の場所についたようだ。兵士の一人が木製の扉を開ける。

もう一人の兵士とともに部屋に入ると、扉が閉じられた。扉を開けた兵士はそのまま外で待つのもかもしれない。俺が逃げ出さないように。

相も変わらず石壁の部屋。何本も置かれた松明のおかげでかなり明るい。今までの通路もそうだったが、窓がなかった。

部屋の中には、黒地に金糸でなんとも立派な装飾が施された服を着た、中年の男性がいた。

その男の周囲に、さらに三人の兵士。中年の男性と兵士の明らかな服装の違いから、

この男こそ“グレイン宰相様”なのだろう。

男が口を開く。そして――――

「レナファスへようこそ。異世界の住人よ」

俺を、さらに混乱させた。

混乱、さらに（後書き）

なぜか物語が全然進まない（汗）
次はもっと進みます！

＊投稿してすぐに、主人公の服装を変更しました。

奴隷

こいつは、何を言っている？

グレインはさらに続ける。

「いや、もう住“人”ではないな。貴様は、これから人ではなくなるのだから」

「何を言ぶっ！」

当然の質問を遮って、激痛。兵士の一人に顔面を殴られた俺は、勢いのまま床を転がる。

兵士は無言。ただ、その顔には牢屋の看守が見せたのと同じ笑みが浮かんでいた。

「奴隷風情が口を利くな！」
グレインの怒声。

——俺はただただ、混乱するしかなかった。

人ではない？ 奴隷？ 何を言ってるんだこいつらは？
殴られた右頬から、じんじんと痛みが伝わってくる。

「わざわざ異世界から召喚したのだ。貴様には利用価値がある。死ぬまで働いてもらおうか」

——利用価値？ 俺には何の才能もない。死ぬまで働く？
冗談じゃない。

「おっと、奴隷にはちゃんと誰の所有物であるか証をつけねばな」
グレインが、兵士の一人に顔を向けるのが見えた。その口が紡ぎだす言葉に――

「焼きごてを持って来い」

一瞬、思考が固まった。

――― 焼きごてだと？ ああ、牛に番号をつけたりするやつか？
ばかな、ありえない。こいつらは、正気じゃない！

兵士の体が邪魔で見えなかった、部屋の俺から見て左側の隅。火が燃え盛る暖炉が見えた。

暖炉からは鉄の棒らしきものが突き出している。

兵士が暖炉から取り出した鉄の棒の先端には、赤熱した金属の立方体。最端の面には紋章のような印が刻み込まれていた。

――― まるで判子だ

それが正真正銘の焼きごてだと理解した瞬間、俺は瞬時に立ち上がって背後の扉にとりついていった。

兵士たちが止める間もなく、ドアノブを回す。鍵はかかっていない。

逃げれる！

現実はそのままで甘くはなかった

外開きのドアを左に開くと同時に、右からの拳が俺の鳩尾を捉えた。激痛とともに、部屋の中に送り返される。

再度床を転がった俺が見たのは、扉から室内に入ってくる兵士。さきほど俺をこの部屋に送り届けた二人の片割れだった。

さっきこうなる可能性を考えただけだろうか……！
焦りのせいか失念していた。

「貴様が逃げ出そうとすることなど分かっておる。おい、この奴隷に罰を与えてやれ」

グレインの声に、室内にいる五人の兵士が、心底嬉しそうに頷く。

そこからは、地獄の始まりだった。

突然、後頭部に衝撃。俺の後ろの兵士が蹴飛ばしたのだ。必然的に前方にいる四人の兵士たちの前まで転がる。体勢を立て直す間もなく、今度は下腹部にブーツの爪先が叩き込まれた。

激痛に呻く俺に、兵士たちは容赦なんてしない。

兵士たちの手足が、ろくに抵抗もできない俺に全力で振るわれる。

俺は歯を食いしばるしかない。

救いなんて、なかった。

数分後、兵士たちの暴力がおさまった頃には、俺の感覚は激痛で飽和していた。

体中が痣で覆われ、カッターシャツとズボンにはブーツの足跡が無数についている。

顔も例外なく腫れ上がり、左目が開けられない。

「今日はこれくらいで勘弁してやろう。次に逃げ出そうとすれば命はないと思え」

グレインの声が聞こえるが、今の俺はその方向に顔を向ける気力さえ残っていなかった。

「さて、お楽しみはここからだ。もう一度、焼きごてを持って来い」

くそつたれが……！

レナファス王国の王都ハイダール。そのほぼ中心に位置する王城レナファス、その地下。

敵が侵入した時の対策としてまるで迷路のように張り巡らされた通路に、

異世界の少年の絶叫が響いた。

思考（前書き）

今回は、ちょっと読みにくいかも・・・

思考

俺は再び同じ牢屋に連れて来られた。

前に見たのと同じ看守が、俺を牢屋の中へと蹴り込む。

仰向けで地面に激突するのをなんとか左手だけで支えて防ごうとするが、体力を根こそぎ奪われた俺に、そんな器用なことではできなかった。

バランスを崩して右半身が地面に叩きつけられる。衝撃で痣が痛むが、同時にそれを塗り潰すほどの激痛が走った。

————右手の甲。

そこには、グレインの家紋らしい紋章が真っ黒に焼いて刻み込まれていた。

右手は真っ赤に腫れ上がり、血管が浮き出ている。

止まない激痛の中、俺は呻き声を抑えてベッドまで這って進む。狭い部屋なのが幸いして、すぐに辿り着いた。

左手でベッドの上の粗末な毛布を掴み、氣力を振り絞って体を持ち上げる。

そこまでが限界だった。

俺は焼きごての痕が物に触れないように、甲を上にして右腕を伸ばした体勢で、意識を失った。

今は朝か昼か、それとも夜か。窓がないので知りようがないが、どうやら俺は随分長く眠っていたらしいことが、寝起きの感覚で分かった。

とりあえず今の寝転んだ状態から、足をずらして床におろし、上半身をおこして、ベッドに腰掛ける体勢に変えた。見下ろした俺のカッターシャツとズボンは、兵士たちの足跡が無数についたままだ。当然服を払う。何分かして、大体の汚れを落とした俺は、違和感を感じた。

――――右手が、痛くない。

右手の甲を見ると、依然として焼きごての痕が残っている。が、それ以外はもう、傷を受けて一ヶ月は経ったかのように治っていた。眠る前は真っ赤に焼け爛れて腫れ上がっていた右手の皮膚は、何事もなかったかのように元に戻っている。

傷が治ってる……？

服を脱いで確認してみると、体中の痣が嘘のように消えていた。そういえば、左目も問題なく開けられる。手で触ると、顔の腫れも完全に引いているのが分かった。

どういうことだ？　こんなに早く回復するなんてありえない。

これではまるで――――そう、魔法にでもかけられたかのようだ。

こんなにばかばかしい考えしか思いつかないなんて、今の俺は熱でもあるのかもしれない。

とにかく、傷が治っているのは僥倖だ。今なら、落ち着いて情報を整理できる。

まず、グレインは俺を“異世界から召喚した”と言っていた。

信じ難いことだが、もしこれが本当ならかなりまずい。ここを脱出できたとしても元の世界に帰れる可能性は低い。どういう方法で俺をこの世界に召喚したのかは分からないが、異世界から人を呼び寄せるなど、そう簡単にできることではないだろう。

俺が元々いた世界では異世界の存在なんて信じていたものはいなかった。少なくとも俺の周りでは。元の世界の技術を結集しても、異世界へ行くことなどできるとは思えない。ならこの世界は、元いた世界よりも遥かに高レベルな科学技術を持っているか、もしくは科学に代わる、俺の世界にはない技術を持っているか、のどちらかだろう。

おそらく、後者。この牢屋の石壁や兵士たちの装備を見る限り、科学文明が発達しているとは思えない。

異世界に干渉できるほど高度な科学技術があるなら、兵士が帯剣しているなんてありえないだろう。

銃が発明されていないだけだとしても、金属の鎧を着ているのはおかしい。元の世界では、刃に耐性がある繊維が発明されており、軍隊の迷彩服などに使われていた。たとえ剣や槍で戦うのだとしても、重い金属の鎧を着込むよりよほど効果的はず。

なら、科学に代わる技術とは何か？ これについてはさっぱり分からない。長く歩いた通路にも、グレインがいた部屋にもそれらしきものは無かった。

ただ一つ、思いつくのは――――

体中の傷が治っていたことか。

さっき俺は、傷が治っているのを見て、“魔法のようだ”と思った。痣や火傷を、痕は残るにしろ一日で完治させるような医療技術、元の世界では聞いたことも無い。ならば数時間で俺の体を治療を可能にしたのは、この世界独自の“魔法のような”技術だと考えられる。おそらくは、それに俺を召喚した技術も含まれるのだろう。元の世界では、自動車もロケットも医療技術も、根本には科学という技術があったのだから。

俺が兵士やグレインの言葉を理解できるのも、その技術のせいかもしれない。世界が違うのに言葉が同じ、なんていうのは考えられない。

次は、俺がこれからどうなるか、だ。

グレインは俺のことを“奴隷”だと、死ぬまで働いてもらうと言っていた。最初に人ではなくなると言ったことから、この世界には奴隷制が根付いており、奴隷には人権などない、というのが推測できる。

この世界に人権という概念があるのかは不明だが、少なくとも奴隷は人間ではない、という考えが、この世界もしくはこの国にあるのかもしれない。なら、奴隷という今の状況は最悪だ。何をされるか、またはさせられるのか分かったものではない。なんとか逃げ出して、元の世界に帰らなければならない。

もう一つ、気になることがあった。グレインが言った、“レナファス”という単語だ。

文脈から、レナファスとは場所であり、今俺がいる範囲がそれに含まれる、というのは分かる。

問題なのは、レナファスというのがこの建物のことなのか、それともこの国の名前なのか、だ。

いずれ脱出に成功した時のことを考えて、少しでも情報が欲しい。名前なんて些細なことだと思うが、知っているのと知らないのとでは大きく違うだろう。

グレインの言葉を思い出せば、推測はできる。

まず、グレインはここの看守に“宰相”だと言われていた。元の世界の日本と同じ用法をするなら、

脱出はさらに難しいだろう。宰相といえば、古代中国においては幼い天子の代わりに政治を取り仕切る役名だ。日本でいう摂政のようなもの。他にも首相や総理大臣という意味もあるが、奴隸制があることを考えると、この国では民主制ではなく王制により政治が行われている可能性が高い。

つまり、グレインは事実上この国のトップだと考えていた方が良かったろう。

そこまで身分が高いグレインが“ようこそ”とまで言うのだから、おそらく、レナファスというのは国名だ。ここは自分の国だ、という考えがあるに違いない。

突然、間近で足音が響いた。いや、思考に没頭し過ぎて近づく音に気づかなかったのだ。

俺が伏せていた顔をあげると、そこには――――

魔女がいた。

魔女（前書き）

二日ぶりの投稿となります。本当は、冬休みの間は毎日投稿する予定だったのですが、お正月ということで色々と出かけておりました。今日から九日までは毎日投稿しますので、是非チェックして下さい！

魔女

魔女。どこからどう見ても、魔女。

ほとんど装飾のない黒のローブに、同色のとんがり帽子。杖は持っていないが、俺のイメージからすると完璧に魔女だった。

若いが、多分俺よりは年上。身長は俺より少し低い。165? ほどか。ここの看守とは違い、目も髪も黒だ。髪の毛の長さは体に隠れて見えないが、おそらく腰ほどまであるだろう。白い肌、細い眉毛に切れ長の目、すっと通った鼻、小さな唇と、相当な美人だ。

――いくら美人だろうが、奴らの仲間ならば警戒しておくに越したことはない。

魔女が口を開く。

「ああ、起きてたんだ。」

俺は無言で顔を背けた。

「へえ、そんな態度していいの?」

言うと同時に、俺の視界の右に明るい光が届いた。

顔を戻すと、ありえない光景が視界に入る。

魔女が水平に右手を掲げていた。手の平の上に、火の玉が浮いている。

「……は？」

魔女は笑顔だった。笑顔のまま、手の平をこちらに向けた。

直後、火の玉が俺へと猛スピードで飛来した。

かわすことなどできずに、右胸の辺りに着弾する。

次の瞬間には、

「あああ、ッ！？」

炎が体全体を包んでいた。

火達磨になりながら床を転げまわる。熱い！ なんとか体をはたいて鎮火しようとするが、無駄な行為だった。絶叫しようと口を開けると炎が入り込んで、口内を焼く。激痛に叫ぼうとしても、喉まで焼けてしまったようで声など出ない。服も焼け落ち、一部は体に張り付く。鼻から呼吸をしようとしても、一瞬だけ、髪が焼ける嫌な匂いを感じただけで、炎で塞がれた。体が外から内から焼かれている。

死ぬ――――――

そう思った直後、体を包む炎が一瞬で消えた。呼吸が楽になるが、体中の火傷までが消えたわけではない。体は未だ高い熱を帯び、刺すような激痛に包まれていた。ぎりぎりでも無事だった両目で自分の状態を確認するが、ひどい有様だった。火傷を負っていない箇所はほとんどなく、全身が焼け爛れている。

火傷で筋肉が引きつり、体をまともに動かせない。炎が消えたところで、もうじき死ぬことは確定だ。

突然、痛みがやわらいだ。激痛がどんどん引いていき、固まった筋肉が動かせるようになる。体へ視線を向けると、体が修復され始めていた。焼け焦げた部分が切り離されるように落ちていき、その上を新しい皮膚が覆っていく。神経が繋がっていくのか、石床の冷たさを感じた。

一分ほどで、全身の火傷が完治した。痕も残っていない。右手の焼印だけはそのままだった。

「あははっ。辛かったでしょ？ 私に逆らったり失礼な態度をとったりすると、また同じ目にあわせるから注意してね」

魔女が笑顔で言う。心底愉快そうな声に、俺は背筋が寒くなるような怖気を感じた。

「ほら、これに着替えて。それとも、裸の方がいい？」

魔女が鉄格子の中に服を投げ入れた。他の囚人が着ていたのと同じ、粗末で薄汚れた灰色の服とズボン、それと布製の下着。

自分が全裸であることなどに気づいていた。死に掛けたばかりのせいか、羞恥心は感じない。

が、全裸で良い事などなく、俺は魔女を睨みながら無言で囚人服を手取る。魔女に背を向け、身に着けた。

着替え終わって魔女のほうへ向くと、魔女が先に口を開いた。

「ほら、出てきなさい。私は宰相様から、あなたが使い物になるように教育しろって言われてるんだから」

魔女はそう言って鍵を出し、扉を開けた。

「ついて来て。逃げようとしたら、分かるよね？」

「……わかった」

俺は了解するしかない。今この魔女に逆らうのは無謀だと、生存本能が訴えてきている。

どう“教育”されるのか分かったものではないが、大人しく従う以外に選択肢はない。

俺は魔女に連れられて牢屋を出た。

魔法

連れてこられたのは、相変わらず石壁で、窓がない部屋だった。いや、ここは部屋と言えない。昨日の午前まで俺に身近だったもので例えるなら、体育館だろう。

そこは四角い巨大な空間だった。入り口から部屋の端まで、70メートルはあるだろう。横幅も40メートルはある。石の天井は20メートルほど上空に存在していた。

「14番、あなたにはこれから魔法を習ってもらおう」

二つほど衝撃的な単語が含まれていたが、俺は聞き返さない。やはり奴隷に人権などないようだ。

名前すら覚える必要はない、ということなのだろう。そういえば、グレインも俺に名前を尋ねなかった。

「魔法、か」

予測はしていたことだが、考えていた単語がそのまま出てくるとは。言葉が通じてても名詞までが同じだとは思えなかったのだが、どうやら違うらしい。翻訳してくれる“魔法”とやらが、俺の記憶からもっとも意味が合うものを選んでいるのかもしれない。おそらくは、俺が発する言葉も、思っているものとは違うのだろう。そうでなければ言葉が通じるはずがない。

「異世界から召喚された者は、例外無く魔法を操る天才だったから

ね。宰相様が何を考えてらっしゃるのかは知らないけど、あなたの魔法に用があるみたいだし」

過去にも異世界から召喚された者がいるようだ。俺が14番と呼ばれることから、これまでに13人が召喚されたのかもしれない。彼らも奴隷となったのだろうか。

グレインは魔法を何に利用するつもりだ？ 俺に魔法とやらの才能があるとは思えない。だが、先ほど牢屋で俺が魔女に燃やされたように、俺の魔法が強い武力となりえるのなら、いくらでも考えられた。

さらに言えば、脱出できる可能性も上がる。魔法を教えてくれると言うなら、喜んで利用させてもらうだけだ。

この魔女は随分とおしゃべりなようだ。今のように情報が手に入る機会がこの先もあるにちがいない。零れ落ちないように、記憶しておかなくてはならない。

「あなたがいた世界には、魔法がないって聞いたけど、本当？」

今までされなかった、質問。無視するわけにはいかない。さっきのような目に合いたくないのもあるが、彼女の機嫌を損ねれば情報が手に入らなくなるかもしれない。

「ああ、本当だ」

「ふーん、そんなの考えられないけど」

中学校時代は部活をしていたから、年上に対しては必ず敬語で話す癖がついていた。だが、現在の俺の状況といい、さっきの殺人未遂といい、少なくともグレインの手下に敬語をつかう気は起きない。魔女は気にしていないのか、俺の声を聞いても普通の返事を返して

きた。

「お前、名前は？」

「奴隷に言う名前なんてないから」

この魔女自身の情報も重要だった。脱出する際に大きな障害となりうるこの女をどうするかで、成功率が変わってくる。魔女の名前は分からなかったが、仕方がない。今この場においてもっと重要なことを聞くまでだ。

「魔法を教えるというが、俺に何をしろと？」

「ああ、そうね。じゃあ、右手を出して」

言われるままに魔女へ右手を差し出す。

「そのまま動かずに目を閉じて」

目を閉じる。足音で魔女が俺の右側へと移動するのが分かった。

「さっきも言ったとおり、この世界には魔法がある。魔法とは、脳のある器官で生成・貯蔵される魔力を使って、世界の理に干渉し、普通にはありえない現象を引き起こしたり、物質を発生させること」

俺は一言も聞き漏らさないように集中する。

「異世界の住人にもその器官が備わっていることが随分前に明らかになってるから、当然あなたにも使える」

「魔法の発動に必要なのは強いイメージと、魔力の放出。でも人間

の魔力は元々蓋がされてて、本来魔法は使えない。この世界の人は小さい頃に周りの人がその蓋を外すから、ちゃんものを考えられる年齢になったら誰でも魔法を使える。魔力の量に個人差はあれど、ね」

魔女が俺の周囲を歩き回っているのが足音から分かる。

「私があなたの蓋を外してあげる」

そう言うと、魔女は俺の頭頂部の辺りを手で触った。

そこに魔力を生む器官があるのか？ そう思うと同時に、脳に一瞬だけ違和感と痛みが走った。

が、それだけだ。とくに変わったという感覚はない。

「これで、あなたは魔法が使える。試しに、そうね、人差し指に火を灯してみて。自分の魔法で傷つくことはないから。イメージができてくれば、あとは発動のきっかけを作るだけ。魔法を発動する意思があれば、魔力は勝手に必要な分だけ放出される」

体に変わりがないので半信半疑だが、聞いてみる。

「きっかけか。どうすればいい？」

「大抵の人は、魔法をイメージしやすいように起こす現象に関連した言葉を言うかな。熟練すれば意思だけでいいけど」

つまり、何も言わずに火の玉を発生させたこいつは、魔法の扱いに

熟練していることになる。

俺がイメージするのは、ライターの火。自分の右手を思い浮かべて、その人差し指に火のイメージを重ねる。あとは魔法を発動する意思と、きっかけの言葉か。よくゲームやアニメで見るような詠唱は必要ないんだな。

「火」

そう呟くと同時に、体から何かが抜けていくような、わずかな脱力感がした。

目を開けると、そこには――――

「成功。やっぱり、異世界人は魔法の才能があるようね」

俺の人差し指に、ライターほどの火が灯っていた。

イメージと全く同じ。

不思議な感覚だ。自分の指に火がついているというのに、熱くない。

「魔法を発動した後も、意志で自由に操作できる。消そうと思えばすぐに消せるし、魔法の内容によっては形を変えることもできる。まあ、物を対象に向けて飛ばすようなことは、発生させた物に重さがほとんど無いときだけだけど。重さがある物を飛ばすには、別で物を飛ばす魔法を発動する必要がある」

「魔法は維持するのにも魔力を消費する。魔力を急激に消費したり魔力が足りないのに魔法を発動しようとする、脳の器官に負担が掛かって最悪死ぬから、魔法は考えてつかうように。ま、あなたが死んでも次を召喚するだけだからどうだっていいけど」

暴言はどうだって良いが、無視できない言葉が出てきた。グレインの手下であるこの魔女が“次を召喚するだけ”と言うなら――――

「なら、俺を召喚したのはお前か？」
「ええ、そうだけど？」

魔女はあっさりと認めた。悪びれた様子もない。

その態度を見て、俺の中にどす黒い感情が湧き上がった。

俺をあんな目に合わせた原因は、この女がつくったのか……！
今まで必死に抑えてきた。さっき死に掛けたときも、本当に死ぬことになるから我慢した。
だが、今はもう、そんな理由で行動をためらう必要はない。

兵士たちから受けた暴行が思い出される。あの屈辱を、今ここで晴らしてやる…！

冷静な思考を塗り潰して吹き出す感情は、俺の右手の平を魔女に向けてさせた。

魔女は今、俺に背を向けている。俺の行動に気づいた様子は無かった。

右手の火を消す。

イメージは既に固まっている。あとは発動するだけだ。大丈夫、できる。

こいつが熟練した魔法使いだろうが関係ない。背後から一瞬で殺してやる。

魔女に聞こえないよう、小さな声でつぶやく――――

「爆ぜろ」

瞬間、凄まじい爆音が鳴り響いた。

罰（前書き）

今回は長めで

罰

魔法は性質たちが悪い。

習って一分の俺が、人一人殺すには十分すぎる威力の魔法を使えるのだから。

――俺がイメージしたのは、テレビでもゲームでも見慣れた、爆発。

数え切れないほど見てきたそれを明確に思い浮かべるのは簡単なことだった。

事実、発動した魔法は石床に大きな破壊の爪痕を残している。

辺りには石の破片が飛び散っていた。魔女がいた場所は硝煙のせいで見えない。

ばらばらに飛び散った肉片を見たくないのでも都合だった。

床や壁をぶち抜くことはできなかったが、あの魔女さえ殺せればそれでいい。

鍵は魔女とともに消し飛んだだろうが、後ろの木製の扉を破壊すればこの巨大な部屋から出れるし、魔法を使えば兵士たちも蹴散らせるに違いない。

ふと、自分が殺人を犯したというのに、脱出できる喜びしか感じていないことに気がついた。

兵士たちを殺すことを前提に思考を進めていることも。

—————ここにいる奴らは、人間の皮を被った悪魔だ。殺したところで、気にする必要はない。

分かり切っていて、くだらないことだった。

結論に達したので、思考の主題を元に戻す。

窓がないことから、ここはおそらく地下だろう。

複雑すぎて道なんて分かりはしないが、どこかに階段があるはずだ。極力見つからないように行動しなくてはならない。

あれだけの轟音が発生したのだ、もうすぐ兵士たちがここに殺到するに違いない。

すぐ行動にでなければ。

魔女がいた辺りの硝煙から視線を外し、後ろを向く。木製の扉を破壊すべく、魔法のイメージを固める。

右手の平を扉に向け—————

「残念。あなたに私は殺せない」

魔女の声が、した。

背後に絶大の悪寒。振り向くと同時に、硝煙の前にいる人影へ向けて魔法を発動させる。

本日二回目の爆音が、部屋の石壁を揺らした。

再び硝煙が漂う。

「あははっ。容赦ないなあ」

魔女の笑い声が響いた。

殺せなかったか……！

だが、なぜ。

爆風を至近距離で食らって、生きているはずがない。それも、背後からの不意打ち。

魔法を発動する時間などなかったはずだ。

俺が攻撃することを予想して、あらかじめ対策をしていた？

十分、ありえる。そもそも、こんな力を手に入れて脱出しようと考えてない訳が無い。

当然、グレインたちもそんなことは分かっているのだろう。

魔女が生きていることが何よりの証明だ。

「あなたってほんとに酷いのね。二回も殺そうとするなんて。牢屋で燃やしてあげた時も取り乱したりしなかったし、やった張本人の私とも普通に話すから、おかしいとは思ってたけど」

「笑顔で人を燃やす奴に言われたくない」

言った途端、硝煙が一気に霧散した。

内側から爆風が起こるように一瞬で消え去り、視界が明瞭になる。

魔女は無傷だった。長い黒髪には乱れすらない。何事もなかったかのように、二本の足で立っている。

「あなたは人じゃないでしょ。ただの奴隷で、名前は14番」

なんと言われようがどうでもいい。反論したところで意味などない。今は最優先で聞くべきことがある。

「なんで生きているんだ？　人が耐えられるようなものじゃなかったはずだ」

俺の問いに、魔女はにやにや笑った。

「知りたい？　知りたいよね？　せっかく習った魔法が効かないなんて、不安で仕方ないよね？」

安い挑発には乗らない。

「あなたに教えたことが間違ってるわけじゃない。あれは全て本当」

「さっきは説明してなかったけど、魔力には波長がある。魔法が発動する一瞬前に、魔法の効果が及ぶ範囲すべてに波長が伝わる。この波長はその人ごとに固定なの。一時的に変えることはできるけどね」

「さっき自分で放った魔法で傷つくことはないって言ったでしょ？

魔力波長の役目は魔法を使った本人を識別すること。本人と放った魔法は当然同じ波長を持つてことはわかるよね？　ちょっと魔法に詳しい人だったら少し時間があれば波長を解析して同調するのは簡単なの。そういうこと」

この魔女はどうやら俺を試しているらしい。

「つまり、同じ波長であれば魔法は無効化されるってことか。お前は、一瞬前に俺の魔力波長を感じ取って、同調してやり過ぎたんだな」

魔女に結論を言いながら、俺の背筋には冷や汗が流れていた。この話が本当なら、俺に勝ち目はない。

「やっぱり、馬鹿じゃないみたいね。召喚された異世界人は皆頭が良いて聞いたけど、本当なんだ。ま、こんなにヒント与えたんだから当たり前か」

魔女の眩きは無視。

「いつ、俺の波長を解析した？ まさかあの一瞬でやったわけじゃないだろ？」

「それこそまさかね。兵士たちにリンチされた傷、治したの私だから。あなたが寝ている間に済ました」

「そういうことか……」
気づくはずがない。

「これでもう、疑問には答えたよね？ 私に逆らうことが無駄なのも理解した？」

魔女の顔には、気味の悪い笑み。自分が絶対的に有利な状況にあることからくる、優越感。

その表情で魔女がこれから俺に何をするのか、簡単に予想できた。

「じゃ、罰ね。グレイン様からは逃げ出そうとしたら殺してもいいって言われてるけど、特別に手加減してあげる」

そう簡単に、やられてたまるか……！

身構える俺の背後から、明るい光。正面に伸びた影は、揺らめいていた。

—————まるで、炎のような

後ろを振り返ったときには、既に遅かった。
俺の視界は迫り来る火球によって塞がれた。

「さっきは目から上を残してあげたけど、今度は全身ね」

その声を聞いてから数秒後、俺の意識は激痛とともに途切れた。

策（前書き）

気づいている方もたくさんいらっしゃると思いますが、前回の魔法の説明の部分に、重要な文章が抜けているのに気づき、訂正いたしました。

興味のある方は読み返してみてください。

最近、文章が荒れている気がする…

策

真っ黒な視界の中に、白い光が差した。

ぼんやりと霞むその光は視界全体に広まっていき、次第に色を帯びる。

見えたのは、灰色の石。奥には、黒い人影が右に90度傾いて立っている。

熱で凝固した眼球からの情報伝達が、完全に再開された。

そこで、自分が倒れていることに気づく。左頬に石床の冷たさが感じられた。

両手で体を起こす。視界に入った右手には、相変わらずの焼印。負ったはずの火傷はどこにもない。

回復がもう終わっていることを考えると、俺の気絶は一分ほどだったようだ。

視線をあげると、魔女が見えた。頭痛がするのか、左手で額を押さえている。

「二回も全身火傷を完治させるのは、さすがに魔力消費が激しくて辛い。治癒魔法はイメージしにくいから、燃費が悪いのよ。あなたを起こすのにも魔法を使ったし。」

「イメージしにくい魔法は魔力を大きく消費するのか？」
立ち上がって尋ねる。

「また殺されかけたっていうのに、質問する余裕があるのね。前に他の奴隷で遊んだときは怯えて会話にならなかったんだけど。錯乱したのも居たし」
呆れたような顔。

俺だって怖い。自分の命を簡単に奪える奴に、恐怖を抱かないわけがない。火達磨になった時の苦痛は、精神に刻み込まれている。だが、それをこの魔女に感じ取られてはまずい。魔法やこの場所について少しでも情報が欲しい今は、虚勢でも余裕があることを見せたほうが良いと感じた。いや、ただの意地なのかもしれないが。

「いきなり火達磨にされたら誰でもそうなる」
冷静に声を出して、そっけなく、一般常識を教えてやる。

「じゃあ、あなたは？」

「もちろん俺だって怖かったさ。少しちびったかも？」
明るい口調で、冗談めかして言う。これが精一杯だった。

「ふーん」

魔女はどうでもよさそうな声を出す。その声に、これまでにない成分が含まれているのを感じた。

突然、足元がふらついた。体勢を崩して、「おっと」と言いながら、二歩ほど左にずれる。

「何してんの？」
さっきと同じ調子の声。

「いや、ちょっと目眩がして……」
左手を頭に当てる。

「魔法をちよつとかじっただけのくせにあんな魔法を使うからよ。私を殺そうとしても無駄なのに。馬鹿なことをしたよね、ほんと。そのアホな脳に負担がかかっているのよ。私の知ったことじゃないけど」

見下すような魔女の声。口調から再度違和感を感じた。

「なんかお前、いらついているな。どうした？」
理由は分かっていたが、あえて聞いて挑発する。虚勢としても十分だし、策があった。

「うるさいな、奴隷ごときが！」
怒声とともに、魔女の右手がこちらに向けられる。その手の前には、これまでよりも巨大な、直径1メートルほどの火球が浮いていた。

「もういいっ！ 何やっても怯えないし、うざい！ 死ねっ！」
怒りに顔を歪めた魔女が、火球を放つ。俺と魔女、5メートルほどの距離をかなりの速さで直進してくる。

だが、予想していた俺は右へ思いつきり飛んで回避した。不恰好な受身をとって、なんとか体勢を立て直す。それと同時に、背後で轟音が響いた。

————人間の悲鳴も。

俺は瞬時に声が聞こえた方向へと走り出して、火球が爆発した後の煙が漂っている中へと走りこんだ。

そこは、この巨大な部屋の入口だった。いや、爆発で扉が吹き飛び、ただの穴となっているそれは、すでに入口とは呼べない。扉があった周辺の石壁が砕け散って、欠片がそこらじゅうに落ちていた。

そしてそこには、体が四散した何人もの兵士たちの姿があった。血の海の中で皮膚が裂け、内臓が飛び出ているその光景は非常にグロテスクだが、それ以上の感想は湧かなかった。これも予測していたことだからだ。

さっき意識が戻った時、俺は左耳が石床についていた。あの時、床を伝わって近づく兵士たちの足音が聞こえていたのだ。まあ、あれだけ大きな音がしたのだから、誰も来ないほうがおかしい。

兵士たちは部屋に入ってこなかったが、扉の前にいる可能性は高いと踏んだ。

なぜ突入しなかったのかは分からないが、もしかしたら誰か魔法で中を確認して魔女の無事を確かめたのかもしれない。そんなことができるのかは知らないが、どっちにしろ兵士たちがいようがいまいがあまり関係なかった。

一番重要なのは、魔女に扉を破壊させることだからだ。

さっきさりげなく後ろを確認した俺は、魔女と俺と扉が直線に並ぶように、わざわざ目眩のふりまでして立ち位置を調整した。そのと

き既に魔女がいらついていることに、俺は気づいていた。どうやら俺の虚勢でしかない余裕が功を成したようで、魔女は俺が怯えたそぶりを見せないことに苛立っていたのだ。最初の気味の悪い笑顔を見せなくなり、俺を馬鹿にする言葉が増えた。分かりやすい変化だった。

確信した俺がちょっと挑発してやると、魔女は思い通り魔法を使ってきた。どんな魔法かまでは予測するしかなかったが、魔女はこれまで火球ばかり使ってきた。考えてみれば、ここは文明レベルが中世の世界だ。もっとも見慣れているのは火だろう。元の世界の日本では松明で明かりを確保したりはしないが、この世界の住人には生活必需品ではないのか。当然外を見たことは無いので、これも推測にすぎないのだが。

奇跡的な確率だったが、兎にも角にも策は成功。

俺は穴の手前で思い切り床を蹴って跳躍。左右に伸びた通路のうち、右を選んで飛び込んだ。

一瞬後、穴から火球が飛び出して通路の壁に垂直にぶつかり、爆発。轟音が鳴り響き、石壁が破碎されて四方八方へ飛び散った。

爆風がかすめ、何個か石の破片がぶつかるが、気にはいられない。

やっとつかんだチャンスだ。絶対に逃げ切って見せる。

俺は床に散らばる石と兵士の体を踏みながら、全力疾走を開始した。

脱出

さきほどのような、不確定要素満載の策が成功したのは奇跡だ。

もっと魔女が冷静でまともな人物であれば、絶対に成功しなかった。

あの魔女は最低だ。

今までの女はああいうことを繰り返し、そのつど人の反応を喜んでいたのだろう。

魔女自身が言っていたし、間違いはない。

俺も最初から思いつきで余裕ぶっていなければ、どうなっていたか分からない。

クズが……！

いつか、火達磨にされた借りを返してやる。

俺は今、薄暗い通路を全力で走っていた。

知るはずもない出口や階段の場所を探して敵だらけの場所をうろつくのは、精神的にもキツイが、そうするしかない。つかまれば、俺には“死”という最悪の一択しかなくなるのだから。

これまでいくつかの分岐点を勘で曲がってきた。当然戻り道など分からないし、戻ったところで追跡してきた魔女に殺されるだけ。たまたま出口に辿り着く幸運を祈るしかなかった。

角を右に曲がった途端、兵士が一人視界に飛び込んできた。兵士は一瞬、誰だコイツ？　と言いたげな顔をしていたが、次の瞬間には俺が着ている囚人服に気がついた。驚愕の表情とともに、口を開ける。

が、既に遅い。

俺がこれまでの道程でイメージを固めていた魔法が発動。

爆音と爆風が発生し、兵士の体が粉微塵に吹き飛んだ。血と肉片の一部が、俺に降りかかる。

きっかけの言葉すら必要ない、極限の集中状態だった。

———そこで、自分のミスに気づいた。

爆発の轟音が、兵士たちに聞こえてしまったようだ。「何の音だ！？」「こっちだ！」等の声が聞こえてくる。もしかしたら、俺が脱出したことは兵士たちの大半には伝わっていなかったのかもしれない。魔女が魔法を使えば、兵士たちに俺の脱走を伝えることができるようにも思うが、魔法について詳しいことはまだ分からないし、断定するのは良くない。とにかく、今はここから移動するのが先決だった。

走り出そうと一步踏み出すと、目眩がした。今度は演技ではなく、本当に。魔女の言葉が正しいなら、魔法で脳に負担が掛かっている証拠だ。自分にあとどれぐらい魔力が残っているのかは分からないが、あまり魔法を多用するのは良くないだろう。考えて行動しなくてはならない。

そうこうしているうちに、20メートルほど後ろの角から、何人かの兵士が曲がってくるのが見えた。向こうも俺に気づいたようだ。

「脱走だー！ 囚人が脱走しているぞー！」

大声を上げられてしまった。兵士たちを魔法で爆破しようかと思っただが、まだ距離がある。少しでもはやく逃げ出したほうが良いと判断した俺は、全力で走ってT字路を左へ曲がった。

曲がって前方を確認した俺は、自らの幸運に歓喜した。俺のたった5メートル前、そこには――――

階段が、あった。

よし、地下から逃げ出せば、後は建物の壁を爆破すれば外に出られる。もう少しだ。

喜びと焦りに突き動かされるまま、階段を登りきる。

そして、自分の考えが甘かったことを思い知った。

そこには、何十人もの兵士たちの姿があった。

石壁の広い室内、木製のテーブルや椅子に座って談笑している彼らの中には、鎧を半分以上外している者もいる。こちらに注目している訳ではないのが救いか。

ここは兵舎か？

そうだとすれば、今の俺は絶体絶命だ。後ろからは何人もの追手が迫っている。前には何十人もの兵士。出入口らしき扉までは30メートルほどある。このまま階段の入口にいれば、確実に死ぬ。

———ここは、先手必勝だ。

腹を決めた俺は、室内全体を包む、広範囲な魔法を発動する。俺の魔力波長に気づいたのか、何人かの兵士が驚いた顔で俺の方を見るが、それらは真っ白に塗り潰され、見えなくなった。

発生したのは、部屋を完全に満たす白い煙幕。

そこらじゅうで驚きの声上がるが、彼らの姿は見えない。声はだんだんと、煙たさに咳をするものに置き換わっていった。

あらかじめ深呼吸をしていた俺は、出口がある方向に走り出していた。何人かとぶつかるが、お構い無しに進む。背後で、俺を追いかけていた奴らが到着した足音と、「脱走者がいる！扉を確保しろ！」という声が聞こえた。

もう、遅い。

俺は既に扉の前に辿り着いていた。金属製のドアノブを回して、扉を開ける。外に出て、直ぐに閉めた。

夜だ。

肺の空気を追い出し、深呼吸をする。時間にして一日ちょっとのはずだが、俺は月明かりの懐かしさに涙が出そうになった。

だが、今はいつまでも感動に浸っているわけにはいかない。

俺は兵舎のドアをもう一度開け、中がいまだに混乱から抜け出していないことを確認すると、そのまま10メートルほど後ろにさがる。本当はもっと距離が欲しいが、魔法がどこまで遠くに発生させられるか分からない以上、失敗して時間を無駄にしたくない。

兵舎の前に伸びる石畳の道、等間隔に置かれたかがり火が、俺の姿を照らし出した。

頭頂部からつま先まで、真っ白。

これは恐怖体験で体の色素が抜けたとか、そういうことではない。
発生させた煙幕のせいだ。

俺は最初に使った魔法と同じ、ライターの火を思い浮かべた。それを、開いたドアから覗く真っ白な室内で発生させる。

———これまでよりも遥かに大きな轟音が、夜の大気を揺らした。

兵舎の窓という窓から爆炎が噴出した。衝撃で壁が吹き飛び、石材が撒き散らされる。二階建ての巨大な兵舎は、一階部分が完全に崩壊した。わずかに残った柱では二階の重量を支えられず、二階も兵士たちを巻き込んで崩落していく。十秒たたずに、兵舎は瓦礫の山と化した。

俺が起こしたのは粉塵爆発と呼ばれる現象だった。

粉塵爆発とは、空気中の粉塵の濃度が一定以上のときに火をつければ爆発する、というもの。

俺が発生させた煙幕の正体は小麦粉だ。乾燥した小麦粉を兵舎の室内全体にばら撒き、煙幕にすると同時に、必殺の攻撃手段としたのだ。人間、追い詰められれば思いつくものだった。

魔力で生成した物質は、魔力の供給を止めれば消滅する。といっても、俺が消えろと思っただけで体中の小麦粉が消えた。魔法の行使には、意思が重要な役割を果たすようだ。

轟音を聞きつけて、人が集まってくる音がした。このままここにいろのはまずいと判断した俺は、兵舎前の道を外れ、かがり火の及ばない暗闇へと進んでいった。

出会い

私はいつも、みんなに嫌われています。

ここに連れてこられる前も、連れてこられた後も。

私たちが逃げないように見張る兵士さんは、いつも私にはたくさん悪口を言います。

一日に二回、ご飯を貰える時は、おばちゃんはいつも私だけ量を少なくします。

同じように連れてこられた人も、私にだけはみんな冷たくします。また目が覚めて、一日が始まりました。

今日も、私はみんなに嫌われています。

みんなと一緒に四角い石を運びます。石はとても重くて、体の細い私には、とても辛い作業です。

だからみんなから遅れます。

私と同じように痩せている女の子もいるのですが、そういう子は余裕のある大人の男の人が一緒に持ってあげたりしています。彼らは、私には見向きもしません。

なんとか頑張って、言われたとおりの場所に着きました。みんなから少しだけ遅れた私は、兵士さんにたくさん怒られます。ですが、鞭は使われなかったので、今日は運が良い、と思いました。

私が着いた場所には、作りかけの大きな石の建物があります。私たちはこの建物を作る仕事をやらされています。なんでも、王都を囲

むようにこの建物を作って、その間を石壁で繋ぐそうです。

私たちはまた石を運ぶために、来た道に戻っていきます。

ここに連れてこられてから四年経ちます。

私は、今日も辛い作業を繰り返します。

鐘の音が聞こえました。作業を止めて、住まいへ帰るように、という合図です。

痛む体で、みんなから遅れないように付いていきます。

すぐに私たちの住まいが見えてきました。

木製の、大きな建物です。

ここで、みんなと一緒に暮らしています。

中に入ると、粗末な二段ベッドが所狭しと並んでいます。そのなかに私が寝ているものもあるのですが、

今はそこに用があるわけではありません。すぐにご飯の時間です。

この建物にもう一つある部屋にいきます。

そこでは、私と同じように連れてこられた人たちが、たくさん並んでいました。

配給所のカウンターで、ご飯をつぐ係りのおばちゃんがみんなにご飯を配っています。おばちゃんは、私の番になるとあからさまに嫌そうな顔をして、前の人の半分ほどしかついでくれませんでした。

たくさん連れてこられた人が、一日で笑顔になる数少ないときに、私は空いた机に一人だけ、ぽつんと座って食べます。

彼らは、私には見向きもしません。

その日の夜、建物を抜け出した私は、住まいの近くの崖下で、一人の少年を見つけました。

うつ伏せに倒れているので目の色は分かりませんが、この国では珍しい黒い髪をしています。

————私と、同じ色。

私と同じ服を着ています。この人も連れてこられたのでしょうか。

彼の体には、たくさんの擦り傷と葉っぱが付いています。

もしかしたら、崖から落ちてきたのかもしれませんが。

上を見上げると、周りにそびえたつ木の枝が、所々折れていました。木がうまくクッションになったのでしょうか。彼はちゃんと生きています。

私は、“同族”かもしれない彼の顔が見たくなりました。

彼の体を起こして、今度は仰向けに寝かせます。

彼は、この国の人とはどこか雰囲気の違い、それでいて整った顔をしていました。

少しだけ浅黒い肌をしています。

そういえば、東方の人は日に焼けて肌が黒くなっていくと聞いたことがあります。

ここからは遠く離れた国から来た人なのでしょうか。

でも、世界中どこに行っても、私の“同族”はいます。

東方の人は黒髪がほとんどだと聞きますが、それでも私の“同族”である可能性はあります。

彼はきつと、どこか別の場所から逃げてきたのでしよう。

彼の体には、どこにも魔力を封じる類のものは付いていません。

もしかしたら、彼が私の“同族”なら、私をここから逃がしてくれるかもしれません。

ずっとずっと、永い間迫害されてきた“私たち”は、仲間意識がとても強いのです。

私の左足の足首についている足かせのせいで、私は魔力をまったく使えません。

“私たち”は、魔力さえ使えば普通の兵士さんなんかには負けないのだと、前に会った、私とは別のグループにいる“同族”のおじいさんが言っていました。

私は魔力を使ったことはないので、どれぐらい強いのかは分かりませんけど。

小さな呻き声とともに、彼の目が開き始めました。

私は、突然怖くなりました。彼は私の“同族”なのでしょいか。もしそうでなければ、彼もまた私を嫌うかも知れません。私の周りの人たちと同じように。

彼の目が、私を捉えました。

信頼（前書き）

今日から学校が始まったので、これからは平日の更新が夜になります。

土日はなるべく早い時間に投稿します。

これからも毎日更新していくつもりなので、どうかこのままお付き合い下さい。

信頼

意識が覚醒していくとともに、鈍い痛み。

あちこちに打ち付けたらしい痣が、体中にできているのを感じた。

ぼやけた視界、緑と茶褐色の中に、白と黒とグレーを見つけた。俺の右側に立っているらしい人影の姿が、次第にはっきりと映し出されていく。

———
奴隷か。

薄汚れた囚人服を着た少女だ。

俺よりは年下か。黒髪は肩までのショートカット。日本人と西洋人のハーフのような、綺麗な顔立ちをしている。が、半袖の囚人服から覗く腕は、栄養状態を物語るように細い。十分に食料を与えられていないのは明白だった。

「お前は…?」

立ち上がった俺の質問に、少し怯えたような表情。俺より10?ほど小さい彼女は、おずおずと口を開く。少しだけ、期待の色が見え隠れする声。

「あなたは、魔族ですか……?」

帰ってきたのは意味の分からない質問だった。

「魔族？」反射的に聞き返してしまう。

「……違うんですか？」表情に、わずかな変化。落胆したような、それでいて寂しそうな、顔。

その表情をみて、言葉が詰まった。

どうする？　ここで“魔族”とやらのことを聞いてみるべきか？

俺はこの世界に詳しくない。

一般常識なら知っていたほうが良いだろう。だが、常識的なことほど、問うと疑問に思われるものだ。

それより。

——この少女は何者なのか。なぜ、俺のことを“魔族”とやらだと思ったのだろうか？

俺の特徴が、その“魔族”と一致しているからか。

俺の、今まで見てきたこの世界の人間と違う点と言えば、髪と目の色。魔女は黒髪だったが、グレインは茶髪、兵士たちには金髪と茶髪しかいなかったように思う。割合で考えれば、黒髪と黒目は圧倒的に少ない。

目の前の少女も、黒髪で黒目。なら、彼女も“魔族”とやらなのか。

「お前は、魔族なのか？」

質問に返された質問に対して質問で答える。

「……」

俺の返答から、“魔族”ではないという意味を感じ取ったのか、彼女は黙ってしまった。

何かに耐えるような表情。まるで、質問を肯定すれば俺に何かされらると思っているような、それによって自分が傷つくことに備えているような。

——— “魔族” ってのは、そういう存在なんだな。

彼女の表情と囚人服、細い体が、全てを物語っている。だが。

「魔族って、何？」

聞かずには、居られなかった。この会話が行き着く先は予想できている。それでも俺は、今日の前にいる少女に対して、敵意がないことを証明したい。しなければならぬ。

最初に抱いた警戒心は、跡形もなく消えていた。

「え？」

声と同じ、驚きの表情。

「……知らないんですか？」

ありえないものを見るような、疑念に満ちた声。

「ちょっと訳ありでな。詳しくは何も」

普通の調子で、いかにも分かってなさそうに言った。

「……」

また、黙り込む。俯いてしまった。

彼女は今、必死に考えているはずだ。俺の言っていることが本当かどうか。そして、それがもし本当なら、“魔族”について説明して良いのか、と。

俺は“魔族”について何も知らない。だが、彼らがどのように扱われているか、簡単に予想できる。予想が正しいなら、彼女が自らの種族の説明をためらうのは当然のことだ。

“魔族”について知った俺が、彼女に危害を加えないとは限らないのだから。

「ちょっと俺の話、聞いてくれない？」

彼女が、突然話し出した俺に驚いたように顔を上げる。

「俺が奴隷なのは、分かるよな？」

自分で認めたことはない事実だが、今はしかたない。

俺の服に視線を向けて頷く少女。

「俺がもともといた国には、奴隷なんていなかった」

驚いた顔。やはり、この世界は奴隷制が広く根付いているようだ。

「それで、“魔族” ってのもいなかった」

持続する驚愕の表情。

「誰も、奴隷みたいに自由を奪われて虐げられることはなくて、他の国よりもずっと平和だった」

目を丸くして驚く彼女の顔が、妙に可愛かった。

「俺は誘拐されたんだよ、この国の奴らに。突然つれてこられたから、何も知らないんだ」

一転して、目を伏せる少女。彼女も似た経験をしたのかもしれない。

「だから色々教えて欲しいのが、一つ。もう一つある」

言葉を区切る。

「俺の国には、どんな種族も平等っていう考え方があった」

彼女はよく意味が分かっていないようだった。

「人には種類があるだろう？ それぞれ特徴の違う人種が」

この世界で言う、普通の人間と“魔族”。他にどんな種族がいるか分からないので、慎重に言葉を選ぶ。

「どんな特徴があろうとも、それは同じ人間であることに変わりはない。そう考えられてるから、特定の種族を迫害することは禁じられている」

だから、と彼女の目を見て。

「俺は“魔族”とやらがどんな種族だろうが、それを理由にお前を傷つけるつもりはない」

なるべく真剣に、かつ優しく宣言する。

彼女は呆然と、ありえないものを見るような表情をしていた。

「……あなたは、違う世界の人ですか？」

まさかの返答に、驚愕した。

俺は、彼女が俺の国の場所を尋ねると予想していたから、その時に異世界人であることを明かすつもりだったのだ。ピンポイントで言い当てられるとは思っていなかった。

「よく、分かったな」

「だって、この世界のどこに行っても、私と同じ魔族は居るんです。人がいる場所に必ず。それに、この世界には古くから異世界人の話が伝わっていますから」

彼女から初めて、質問の答えが返された。

「俺に教えてくれるのか？」

少しだけ微笑みながら、聞く。

「あなたが優しい人だというのはよく分かりましたから。今まで会ったことがないくらいに」

彼女も、初めて微笑みを返してくれた。さっきまでの怯えた彼女からは想像ができないほど、親密で暖かい微笑みだった。そこには、先ほどの警戒心は微塵もなかった。

「優しい、ね」

兵士を躊躇もなく殺したことを思い出す。生き残るためにやったことだから、後悔はしていない。だが、優しいという表現は人殺しには合わない気がして、力なく笑った。

「じゃあまず、魔族についてですよね」

最初とは真逆に、生き生きと話す少女。

彼女の方から話してくれるのが、なぜか妙に嬉しかった。彼女の信頼を得られたことを自覚すると、自然に口の両端が上がっていた。

俺は、この少女との会話で、この世界に来て初めて笑顔になれたことに気がついた。

キク

木々が生い茂る森の中、打ち解けた俺たちは一本の木を背に並んで座っていた。

「聞いとおきたいんですが」

さあこの世界のことを聞こう、というときに少女から突然の質問。

「何？」

聞き返してみると、

「名前を教えてください」

「ああ」

至極当然な問いかけだった。

そういえば、互いに名乗ってなかった。

「俺は高橋徹夜。お前は？」

なんだか、自分の名前を思い出すことがかなり久しぶりに感じた。

昨日か一昨日かまでは、一度も名前を呼ばれない日なんてなかった。必ず学校で誰かに名前を呼ばれ、また俺も学友の名前を呼んでいた。

学校、か。

今頃、向こうの世界の友人や家族たちはどうしているのだろうか。おそらくは、俺がいなくなったことにまだ気づいてないだろう。一週間はのんびりと羽を伸ばすつもりだったため、バイトや友人と遊ぶのは後回しにしていたのだ。さらに俺は一人暮らしだ。近くに知り合いの家はないので、突然訪ねてくることもないだろう。つまり、もとの世界と時間軸が同じなら、少なくともあと五日か六日間ほどは誰も気づかない可能性が高い。心配した彼らが警察に連絡したりして面倒なことになるのは避けたいから、それまでに帰れるといいのだが、今の俺には何の当てもない。いざ帰ったら既に俺は死んだことになっていた、ということも十分にありえる。

大変な状況だな……

なぜか他人事のように思う自分がいた。

いや、少しくらい現実逃避しないと、精神が持たない「あの、聞いてます？」　ん？

顔を右横に向けると、少しだけ怒っているような、かつ心配しているような少女の顔があった。

「何？」

「ですから、タカハシが名前で、テツヤが家名なんですかって聞い

たんです」

ああ、そうか。

「いや、逆。この国は名前が先なのか？」

「そうです。やっぱり、テツヤっていうのが名前なんですね」

ここがヨーロッパに似た文化を持っているなら、当然といえば当然か。

そこで、俺は問いかける。

「なんで逆だって分かったんだ？」

日本人の名前を聞いたことがあるのだろうか。そうでなければ分かるはずはないと思うのだが。

「異世界人の名前は家名が先だと聞いたことがあります」

そういえば、さきほど異世界人の伝承があったと言っていた。

待て、異世界人の伝承の中に日本の文化が記されているということか？

なら、今まで召喚されたのは全て日本人か？ 他国の人間は召喚されないのか。

そもそも召喚される条件とはなんだ？ 仮に日本人だけが対象だとしても、一億三千万人以上いる。わざわざ異世界から呼び寄せるのだから、目的があるはず。利用価値のない人間を召喚する可能性を考えると、無作為だとは思えない。一定以上の能力なり資質なりを持つている者に限られるはずだ。

だが、俺は自分に特別なものを見出すことは出来なかった。

今はこのことを考えても仕方がない。情報が無さ過ぎる。

「さっき言ってた伝承とやらか。まあ、それは後で聞くとして」
今この場において、もっと重要なことを聞く。

「お前の名前は？」

少しの間。

少女の目は、左右に落ち着きなく動いていた。

「あの、実は、その」

戸惑うような、ためらいの声。

——「名前が、無くて」

悲しそうな、寂しそうな表情。

消え入るような、小さな声で。

少し、驚いた。

「そう、か」

また、言葉が詰まってしまった。

「今までは、なんて呼ばれてたんだ？」

予想はつくが、一応聞く。

「おい、とかお前、とか魔族とか、です」

今までの生活を思い出したかのように、曇る表情。伏せられた目。

この表情のせいだろうか。俺の中で、結論は既に出ていた。

俺には、慰めになるような、気の利いた言葉は言えない。

だから。

「それじゃ、これから不便だな。名前が欲しいか？」

だから、問いかける。

「名前は、欲しいですけど、これからって？」

「俺にこの世界のこと、教えてくれるんだろ？ 言っとくけど、俺の無知レベルは半端じゃない。今ここで数時間話したくらいじゃ、全く足りない。だから、まずは逃げよう。ここから逃げて、安全な場所についたら、ゆっくり教えてくれ」

魔法を使えば、普通の兵士くらいは何とかなる。

「どれくらいの期間になるか分からないけど、俺はお前に着いて来てほしい。この世界のことを全く知らない俺をフォローしてほしい。でも名前がないと不便だから、俺がつけてやる。」

「それとも、ここにいたいのか？ 俺と一緒に逃げるのは嫌か？」
彼女に、問いかける。

「私は、ここにいたくは、ありません。でも、私は魔族で「そんなことはどうでも良い」え？」
そんな後ろ向きな考えは全て却下だ。

「さっきも言っただろ？ 俺は魔族がどんなものか知らないし、知ったところでどうこうするつもりもない。俺にはお前が必要だ。種族云々じゃなくて、俺はお前個人に言ってる」

さっきよりも近い場所で、彼女の目を見て言う。彼女もまた、俺の目を見ていた。

「それで、お前は どうしたい？ 一緒に来るか？」
最後の問いかけ。答えは。

「お願い、します」

小さな、涙声。

彼女の両目の端から、透明な液体が零れ落ちた。真っ白な肌を伝っていく。

「お前の名前は、キク」

俺は決然と、何の迷いも含まない声で、告げた。

「……キク？」

流れる涙を拭いながら、問い返す少女。

「意味は、一応ある。お前が俺に教えられることを全て教えてくれたら、話してやるよ」

「ありがとうございます……っ」

泣き止まないキク。俺はそれを見守るだけ。

それからしばらくの間、俺はキクが泣き止むのを、すぐそばに座って待った。

この世界にも存在する月の光が、俺たちを優しく照らしていた。

足かせ

「なんで、ここに倒れてたんですか？」

数分して、泣き止んだキク。いきなりぶつけられた疑問に、俺は笑うしかない。

「いや、捕まってた所から逃げ出したまでは良かったんだけど」

続きを言いずらかった。

「初めて外に出たらもう暗くてな。前が全然見えなくて、道も分からないから、とりあえず見つからないようにすぐそばの森に入ったんだよ。で、しばらく直進してるといきなり視界から木が無くなって、おかしいと思ったときには踏み外してた」

自分で言っていて、ちょっと恥ずかしかった。落ちる時に「おおっ！？」という間抜けな声を出した事は永遠に秘密だ。

「で、そのまま落ちて木に突っ込んだところまでは覚えてる」

木の枝で切ったのか、顔や手足に浅い切り傷や擦り傷があった。少し痛い。

今が夜なのを考えると、おそらく気絶していたのはほんの一、二時間だろう。まさか一日丸々眠っていたとは思えない。

「で、目を覚ましたら、お前がいたっていうこと」

キクは納得したように頷く。俺は内心、いつか今の話で笑われないかヒヤヒヤだ。

ま、キクはそんな奴じゃないだろうけど。

「じゃ、まずは逃げるか。ほら、立って」

俺は立ち上がるとともに、三角座りのキクに右手を差し出す。キクは一瞬、戸惑うような顔を向けたが、すぐに俺の手を掴んだ。

「あ、すいません」

俺の手を支えにして、立ち上がる。

「これからよろしく、キク」

「こちらこそよろしくお願いします、テツヤさん」

とりあえずは出発したい。いつ俺を探して兵士が来ないとも限らない。だが、その前に聞くことがある。

「キク、お前はなんでこんな夜に外にいたんだ？ まさか寝起きする場所も与えられないほど、魔族の扱いは酷いのか？」

考えたくは無いことだが、俺は構わず聞く。

「寝る建物があります。でも、そこに居ても邪険に扱われるだけですから、よく抜け出すんです」

また暗い話に繋がったが、今度はキクが悲しそうな表情になることはなかった。

その理由がなんとなく予想できて、なんだか嬉しかった。

「そんなにずさんな警備なのか？」

それなら、ここから逃げ出すのは楽そうだが。そうではないのだろう。

「私の足首には、足かせが付いています」

言われて、キクの足元を見る。彼女の左の足首に、真っ黒な金属でできた足かせがはめられていることに初めて気がついた。

「名前は知りませんが、この足かせに使われている金属が、私の魔力を全て遮断しているんです。あ、魔法は知っていますか？」

「ああ、一応使える」

「じゃあ分かると思いますけど、魔力には波長があります。この足かせの金属は生物のどこに触れようと魔力を封じてしまいますが、魔力波長だけでは何十倍にも増幅させて円の形に放出するんです」

つまり発信機のようなものか。なんとも便利な性質の金属だな。

「魔法を少し上手く使える人なら魔力波長を感じることが出来ますから、このまま逃げるとすぐにばれてしまいます」

「だから警備に力を入れる必要はないってことか」

そうです、と頷くキク。

「全部、随分前に会った魔族の人に聞いたことなんですけどね」

「でも、信用できるんだろ？」

彼女はまた、頷いた。

それなら、答えは一つだ。

「じゃあ壊すか、それ」

「……できます？」

ちよつと不安そうに、上目遣いでこちらを見る彼女。

「そいつに魔法が利くなら、な」

キクは記憶を探るように目を右下に向けた。

「確か、触れている人以外の魔力には反応しないって聞きました」

なら、俺の魔法で壊すことは可能か。だが、まだ問題がある。

「ちよつと失礼」

言いながら屈んだ俺は、月明かりでキクの左足首の足かせをよく観察する。

足首と足かせの間には2ミリほどこしか隙間がない。下手に魔法を使

えば、彼女の足首ごと吹き飛ばしてしまうことになる。魔法を使えるようになってまだ一日も経っていない俺がやるには危険すぎた。

だが、これだけはやらねばならない。

一つだけ、思いついた。

「これから足かせを壊すから、絶対に動くなよ」
言いながら、イメージを固める。失敗は許されない。

魔女を殺そうとした時よりも、遥かに緊張していた。

魔法が俺の人差し指を向ける場所に正確に放たれるようにイメージする。

一度練習しようと思った俺は、右手の人差し指を地面に向けた。

次の瞬間、俺の人差し指から、流動性のある何かが凄まじい勢いで発射される。

俺の指から切れ目なく発生し続けて細長い線のように見えるそれは、直径3センチほどの小石に着弾する。俺の人差し指の動きに従って両断。地面の奥深くに消えていった。

予想よりも高い威力に、少しだけ驚いた。

一応は、成功。完全にイメージ通りだ。これなら、いける。

俺は再度、キクの足首に目を向けた。魔法が発動する直線上に彼女の足がこないよう、足かせの側面に狙いをつける。もちろん、触れてはいない。

そして再び、魔法を発動した。

「痛っ！」

声とともに、キン、と澄んだ音が響いた。

足首には、深さが1ミリもなく、血も出ない切り傷が一筋ついてい
る以外には何も無い。

———足かせさえも。

俺の魔法が両断した足かせは、数字の3のような形になって地面に
転がっていた。

成功、だ。

安堵の息を吐く。緊張から開放された俺は、そのまま右の膝を立て
て座り込んだ。

———俺がイメージしたのは、ウォーターカッターと呼ばれ
るもの。

水に高圧をかけて狭い口から発射することで、凄まじい速度で飛び

出させる。人間にはとても目で追うことはできないその速度は、ただの水にあらゆる物を切断する切れ味を与える。金属の足かせも、ウォーターカッターの前には薄紙に等しかった。

動画サイトで何回か見たことがある程度だったが、なんとか発動できた。

「大丈夫か？」

足首の傷を心配して、声をかける。

「大丈夫です。浅いですし」

キクは笑顔で言う。傷の痛みよりも開放された喜びの方が大きいようだった。

傷のことを気にしていない態度に、安心して自分が出た。まあ、それはいい。

なんにせよ、これで逃げ出せる。

「よし、行こうか」

立ち上がって、服についた土を払う。キクの方を向くと、嬉しそうに顔をしていた。

「はい。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

さっきも交わしたような会話だったが、細かいことはどうでもいい。
キクとともに、一歩踏み出す。

俺たちの物語は、ここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265ba/>

反乱の灯火

2012年1月12日21時00分発行